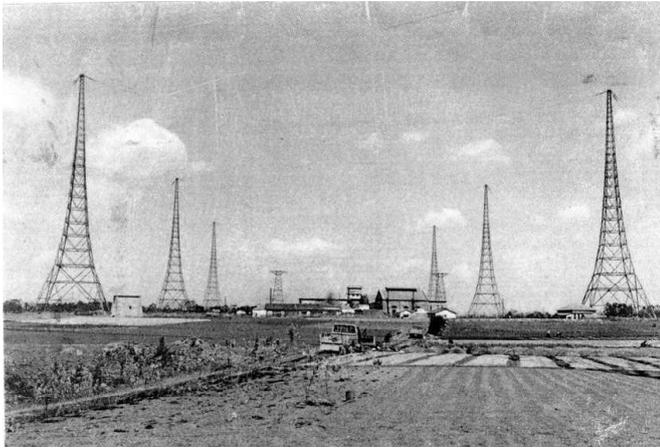


行田無線塔



行田団地の一帯は昭和42年(1967)まで無線送信所があったところです。当初は船橋海軍無線電信所とよばれ、大正4年(1915)に開所しています。逓信省船橋無線局も併設されていました。明治38年(1905)の日露戦争における日本海海戦で無線の有効性が証明され、さらに大電力の無線電信所が望まれたことによります。

完成した当時東洋一と呼ばれた海軍船橋無線電信所は日本の耳と口として活躍しました。そればかりではなく通信技術の実験

場として、日本の通信技術の向上に大きく貢献してきた事をわすれてはならないでしょう。しかし市民の印象としては、関東大震災の時のデマの発信地として、また太平洋戦争の開始命令を打電したとして、負の遺産と感じている人が多いようです。

しかし、船橋の空高くそびえていた当初の200メートルの主塔にしても、昭和16年(1941)改修の182メートルの六本の自立鉄塔も、空高くそびえ、海上からもよくみえたことから船舶のあてとなり、昭和12年制定の船橋市歌をはじめ、端唄や民謡などにも歌われました。現在でも市内いくつかの学校ではその校歌の中に歌いこんでいます。

軍事基地としての船橋無線電信所の存在は別として、船橋の無線「塔」は半世紀にわたって市民に親しまれてきたのでした。今は鉄塔も中心の建物もなく、円形の道が当時の規模を物語っています

葛飾川上流の古作



葛飾川の上流に位置しているのが古作です。古来からの栗原八郷の中でも、最北端にあるこの村は小さな谷間にあることから古谷、古作あるいは小作と呼ばれたともいいます。すっかり住宅地となった葛飾川の谷に開く小さな支谷に面した入江のような場所に神社もあり、寺もあります。いくつかの伝承をふくんでいますが、そのいわれはよくわかりません。古作という地名には「小谷」「古作」「小作」という説があります。「小谷」説は集落があるところが小さな谷であることからきています。今は道路ができて南北に分断されてしまっています。

「古作」説は古くから耕作地があったという意味かもしれませんが、葛飾川の谷のうちで上流に属しますが、小さな谷があって、そこが古くから開けていたというのです。「小作」説は、江戸時代の記録に小作人が多かったなどと書かれていることによります。集

落の名は集落が立地する土地の地形的特色が一番使われますから、この村は小作人が多かったとする話もありますが、「小谷」というのが正しいかもしれません。「谷」は千葉県に多い地名ですが、「サク」「タニ」「ヤツ」「ザク」などと読まれています。

北端を通る重要な街道である木下街道とは、あまり関わりなく過ごしてきたように見えます。現在、古作の大部分は日本中央競馬会の中山競馬場の敷地になっています。

飛谷津と飛ノ台史跡公園博物館

「飛谷津」とその北側の台地には「飛ノ台」という小字があります。「土浮（どぶ）」から「飛」に変化した、泥深い土地であったことからつけられたと思われます。城門川の谷の出口を天沼の砂丘が塞いだことによって湿地帯になったのでしょうか。

「飛ノ台」には縄文前期（7,000～8,000年前）の遺跡が昭和7年（1932）に発見され、話題になったところです。その一部に「飛ノ台史跡公園博物館」が開設されています。

縄文遺跡の上に作られたこの博物館は名の通り史跡公園もかね、基本テーマを縄文時代に特化させているところに特色があります。公園から南側の崖を望むと、縄文人がどのような土地に住居を求めたか分かります。

アンテナ跡地

公園前から西へ行くと、道が右へ曲がりまっすぐ行田団地に向かっています。道を含めて50メートルほどの幅のある部分は昭和4年（1929）に国に買い上げられたところで、東京海軍通信隊船橋分遣隊船橋送信所（当時）のアンテナ塔が3基立っていたところです。いま残る畑と住宅の境などに「海軍用地」とした境界標が残っています。

このアンテナは大正4年（1915）に建設されたアンテナ（傘形）の改修計画に基づき、新アンテナ（182m自立鉄塔）までの中継ぎとして建設されたものです。昭和16年（1941）12月の8日の日米戦争開始の合図となった「ニイタカヤマノボレ」は、傘型のアンテナは取り壊されており、6基の自立鉄塔も建設中でしたから、このアンテナから発信したと思われます。

団地に向かう直線道路は、このアンテナの管理道路で、広くなったのは昭和20年以後のことです。

円形道路

船橋の地図でよく目立ち、その由来を聞かれるのがこの円形道路です。

この道路は大正4年（1915）に開設された船橋海軍無線電信所の18本のアンテナを管理するために造られたもので、その外縁が電信所の敷地の境界線です。円形の敷地は直径が800メートル、面積は約50万平方メートルでした。東京近郊でこれだけの平坦地はこの行田台地しかなかったようです。

管理道路の道幅は1m程の小道で、道沿いに18本の60メートルアンテナ（副塔）が昭和16年（1941）まで建っていました。敷地中央にある高さ200メートルの主塔からのアンテナ線を先端部の滑車で受け止めていました。アンテナ線の先には重りが付けてあり、主塔の揺れを緩衝していたのです。

諏訪稻荷社

諏訪稻荷社は、延宝年間に行田新田が開かれたときその鎮守として勧請された神社です。祭神は開墾開拓の神として知られた建御名方富命です。境内には庚申塔や馬頭観世音などの石塔がならんでいます。なかでも天保3年（1832）の二十三夜塔は文字が浮き彫りになっていて市内でも珍しいものです。

大正2年（1913）に海軍が送信所の敷地を買収したとき、半径400mの円の端に神社敷地がかかったようですが、海軍は神社の移転を命ずることなく、その部分を避けて買収したのでした。行田新田の人たち数軒の家が畑ばかりでなく、家屋敷までも買収にかかり移転をやむなくなったことに配慮したのでしょう。その痕跡が神社北側の道の様子に残っています。

円形敷地の境界標

神社のすぐ前に商店がありますが、その先の集合住宅の塀際に境界標があります。

御影石製で一辺が15センチメートルの角柱で「海軍用地」と刻まれています。完成当時の円形敷地の外縁に埋設されたものですが、現在はわずかしか確認できません。

行田無線跡地

円形道路から中に入ります。当時は円形道路から中央の建物に向かって放射状に道がありました。内側はあちこちにアンテナがあるほかは空閑地でしたから、行田新田の人たちは許可を得て賃借しました。畑作を許された人は鑑札を持っていたそうです。現在の樹木は公園建設の際に植栽されたものです。

中央の建物から円形の道路まで、深さ80センチメートルの所に銅線（アース線）が数百本埋設されていました。電波がうまく飛ぶように工夫されたものだそうです。ですからゴボウやダイコンなど根の深い作物は禁止されたそうです。またトウモロコシなどの背の高い作物も侵入者が隠れやすいので禁止されていました。

公園中央部の歩道橋の東側に四角の植え込みが見えますが、これが200mの鉄塔が建っていたところでした。鉄塔は一辺4mの三角柱ですが下端は逆三角形で「ペンシルヘッド状」にすぼまり、末端は直径40cmほどの半球状の鋼鉄の土台にはめ込まれていたのです。200mの頭頂部からは36本のアンテナ線が途中でまとめられて、18本となり円形道路の近くにあった副塔へ伸びていました。この光景を見た人はまるで傘の中にいるようだと語っています。

この歩道橋の場所に道路を斜めに横切って、無線電信所の本体である電信機室と発電機室をふくむ横20m縦30m高さ一四mのレンガ造りの建物があったのです。大正4年（1915）の開所から昭和20年（1945）8月まで、我が国の海軍無線の中核であるとともに無線研究の先頭を切っていた場所であったのです。

跡地返還後の昭和46年（1971）に都市計画のために取り壊されてしまいました。

船橋無線塔記念碑

歩道橋から右下を見ると組まれた石垣の上に記念碑が建っています。近寄って見ると石垣の中ほどには「船橋無線塔記念碑」とあり、その下部に銘板がはめ込まれています。県

立行田公園が建設されることになった時、地元の有志の方が無線の歴史を後世に残したいと記念碑建設を志しました。碑名を「船橋無線塔記念碑」としたところから協力の範囲が限られ、建設には長年かかったようです。記念碑のある東側の中央道路沿いに四角に区切られた一角があり中央に照明塔が建っています。ここが県立公園建設の時に千葉県が計画した無線記念碑の予定場所でした。

歩道橋の北側に J A 関係の金融機関や商店があります。この一角は昭和 42 年（1967）に米軍から返却された後、賃借耕作していた方たちの離作の見返りに、離農者対策の一環として葛飾農協に渡された土地です。現在は一部住宅地になりましたが行田団地の商店街と異なった一角です。



3号鉄塔跡と上山公園

高架線沿い台地上に財務省の寮があります。この敷地が船橋海軍無線電信所（当時は海軍東京通信隊船橋分遣隊）3号鉄塔（高さ 182 メートル）の一辺が 50 メートルの跡地です。前の道は当時の管理道路です。

この時の鉄塔は下部が 50 m 四方の基礎を持った鉄塔でした。建設の際、海軍省はこの部分と管理道路分を買い上げています。この当時建設した 182 m 鉄塔は 6 基ですが、円形敷地外には 4 基（1号鉄塔から 4号鉄塔まで）ありました。現在そのうち 3 基の跡地が、国・公社の官舎になっています。

1号鉄塔から 4号鉄塔までを含む長方形の敷地は海軍省が地主から土地を借り上げています。地主が耕作することは許可されていました。管理道路を行くと上山公園があります。このあたりが葛飾川の谷頭で、小字名を「根切」といいます。台地（山）の麓（根）際という意味でしょうか。

東のソウマント・・馬頭観世音



川沿いに進んでいくと、馬頭観世音が並んでいます。中山競馬場の一角を仕切って置いたようにみえます。古作町の東のソウマントといえます。石塔がきちんと並んでいるので、中山競馬場造成の関係で敷地内にあったソウマントを移してきたものではないかと思えます。全部で 19 基のうち、古い石塔は文化年間（1804 ~ 1818）のもので、文政 2 年（1819）がこれに次いでいます。

中山競馬場が松戸から移転してきたのは大正 8 年（1919）ですから、それ以前の石塔は古作の馬頭観世音ということになります。

新しいのは昭和 49 年（1974）で、八日市場の林氏と市川市若宮の野平家が共同して建立したものです。中央の石塔は土台は明治 38 年（1905）ですが、竿部分は昭和 52 年のものです。竿部分の欠けを八日市場の林氏が改修したものと思われま。

古作墓地

古作の埋葬です。「東の墓地」とよばれています。「西の墓地」はおそらく現在の中山競馬場の中にあつた谷のどこかにあつたと推定できます。墓地は東の墓地に改葬されてい

るのでしょうか。墓地内には安永 8 年（1779）の巡拝塔と、文化 7 年（1810）の三山供養塔、大正 12 年（1923）の馬頭観世音供養塔があります。

熊野神社

熊野神社は古作の鎮守です。江戸時代には三社大権現と呼んでいたそうです。境内地は 6 畝歩で、延宝 6 年（1678）ごろは他に宮免（免税田）九畝八歩を持っていたとされます。本社は紀伊半島にある熊野三社です。

昭和 50 年（1975）11 月に社殿が火災にあい焼失、直ちに復興に着手して昭和 52 年 10 月には本社から家津御子大神を勧請し再建しました。

境内の北隅に船橋名木十選の一つタブノキがありました。木の幹周囲が 475 センチメートルありました。現在はなくなりました。



ありし日の熊野神社タブノキ
(船橋市名木十選)

明王院

明王院は新義真言宗豊山派で、印旛郡井野村（現佐倉市）の千手院の末寺です。そして、このあたりでは萬善寺（本郷・廃寺）、大覚院（西海神・赤門）、吉祥院（西海神・中央病院前）などを末寺としていました。文久 3 年（1863）頃は、五間八間の本堂と五間六間の庫裏を持っていたと記録されています。境内左側には延宝 5 年（1677）建立による地蔵尊像、延宝七年の庚申塔などがあり、右側には六地蔵や延命地蔵などがあります。このように古い石造物があり、かつては大寺であった印象を受けます。

妙見神社

明王院から古作道を行くと右側の台地斜面の途中に妙見神社があります。階段を上って見ると葛飾川の谷が前面にあります。

この神社は一間社流造の小さな社で旧寺内村の鎮守で、天御中主命を祀っています。妙見様と呼ばれ、旧寺内地区の人たちの崇敬をあつめています。10 月 9 日が祭礼日です。境内には樹齢 500 年を数えた松の木（船橋名木十選）がありましたが、昭和 52 年（1977）に枯れてしまいました。境内に記念碑があります。

葛羅之井（かつらのい）古作道を行くと「葛羅之井」があります。作家の永井荷風が散歩の途中に見付けたのが草に埋もれていた「葛羅之井」の碑で、随筆「葛飾土産」に紹介した事から再び世に知られるようになりました。（右写真）



「葛羅之井」は葛飾神社の御手洗の井で、神社の門の脇にあったといわれています。太田南畝が碑の銘文を記しています。

池前には船橋名木十選のケヤキ（幹周り 430cm 樹高 18.0m）が立っています。

宝成寺（ほうじょうじ）

茂春山宝成寺といい曹洞宗の禅寺です。直心場と号します。戦国末に葛西六郎茂春が開いたといわれます。もとは法城寺といって印内の木戸内にあったそうです。江戸時代を通して寺領 30 石で、成瀬氏の菩提寺として続いてきたのです。

山門を入ると右手に鐘楼があります。鐘楼には梵鐘がありません。昭和 18 年（1943）の金属供出でなくなりました。この梵鐘は寛永 12 年（1635）に成瀬之虎が父之成の冥福を祈って造らせたものです。本堂は天明の頃に建てられ相当大きかったといわれていますが、平成 20 年に新しく建て替えられました。

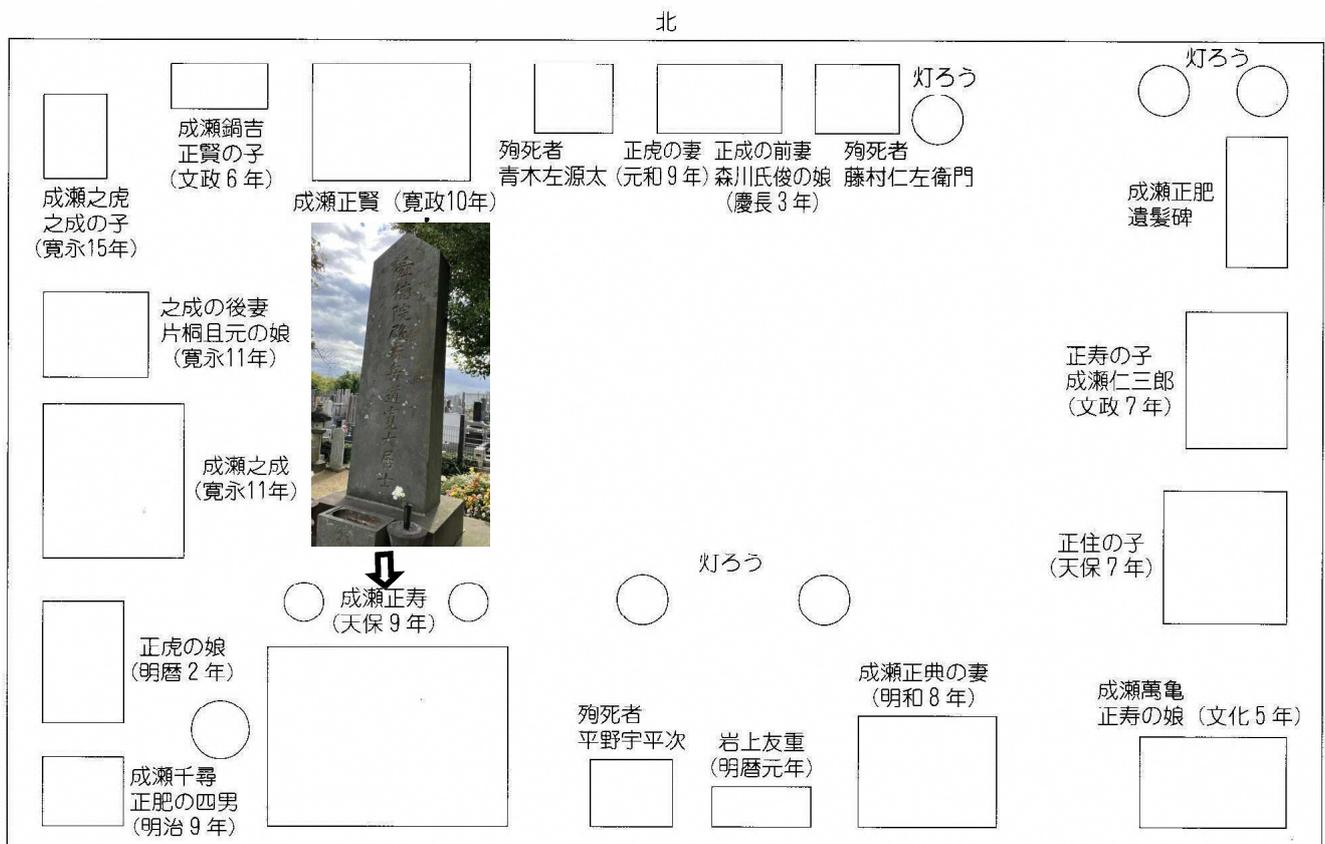
成瀬氏の墓

本堂の左を墓地へ上ると大きな墓石が並んでいます。発掘された墓誌（正寿）とともに船橋市指定文化財（史跡）となっている成瀬氏の墓です。県内でも最大の墓石は第七代尾張犬山城主成瀬正寿の墓です。これに次ぐのが成瀬之成の墓です。

成瀬正成は徳川家康の側近で、関東入府とともに栗原郷四千石を拝領。堺奉行、駿府執政、尾張徳川家の付家老を歴任し、江戸で正成が亡くなると、宝成寺で荼毘に付され、後に日光に葬られました。

この栗原の地、つまり旧葛飾町は大名領でした。大名成瀬氏にとっての初めての領地であったようです。

《成瀬氏の墓地》墓石の配置図



千葉県内最大級の墓石

勝間田公園

勝間田公園は、以前に勝間田池があったところです。万葉集の和歌「勝間田の池はわれ知る蓮なし然言ふ君が鬚なき如し（かつまたにいけはわれしるはちすなし、しかいふきみがひげなきごとし）」にちなむ池といたい所ですが、実は江戸時代頃の作り話です。但し池があったことは事実です。もっとも地元の人には「下戸の溜水」あるいは「本郷の溜」とよんでいました。

この地域の南側に広がる水田地域（葛飾田圃）は沼地もありましたが、これといった川もなくほとんどが天水田で干害を受けやすかったので、台地の麓に出る湧水を溜める池を造って用水としたのです。

公園前の国道 14 号の中央に樹木が並んでいます。実はこの樹木の位置が昔の池の端だったのです。この池には日蓮聖人が鎌倉に行くために船出をしたという伝承があります。

葛飾神社

勝間田公園の西側に葛飾神社があります。「神額」に「一郡惣社 葛飾宮」とあります。一郡とは葛飾郡のことです。村社でイザナミノミコトの他四神を祭っています。祭日は毎年 10 月 14 日・15 日です。葛飾郡という地名は今から千百年前に出来た「延喜式」に初めて出てきます。葛飾郡の中には葛飾神社はここだけですから、「一郡惣社」とは葛飾郡のなかで中心となるものがこの近所に置かれていたのかも知れません。

しかし葛飾神社は初めからここに鎮座していたのではありません。ここには本郷の鎮守の熊野神社があったのです。大正 5 年（1916）に寺内の集落から合祀されたのです。もとの社地が低地である事から、「惣社」らしい所という理由のようです。しかし以前は西側の高台にあったことは『江戸名所図会』からわかります。

本殿の後に船橋名木十選のクロマツ（幹周 340cm 樹高 12.5m）がそびえ立っています。



「葛飾明神社」（江戸名所図会）
葛羅井の左上に葛飾明神がある

庚申塔と葛飾の地名

勝間田公園東側の出口を出ると、横に庚申塔や標識等が建っています。庚申塔の脇を見ると「寺内新田」と刻んであります。

この「寺内」地名は昭和 15 年（1940）に消えた地名の一つです。昭和 12 年（1937）に近隣の二町三村が合併して船橋市となり、「葛飾」という地名が消えてしまうことを憂え、役場があった寺内を「葛飾町」に変えたのです。この葛飾町も今は総武線の南側にしか残っていません。

〈参考〉『船橋の地名を歩く』（2014 滝口昭二 崙書房）『行田無線史』（2019 滝口昭二）
『船橋市史前編』（1959 船橋市） 『船橋市の石造文化財』（1984 船橋市） 『江戸名所図会』（角川書店他） 『ふなばし巨木・名木マップ』（北総の森・巨樹巨木研究会）